

目次

プロローグ	1
月の影法師	4
ペストに倒れて	21

プロローグ

エレベーターもない、古びたアパートの一室に彼女は住んでいた。

そこは黴臭く、今時裸電球が一つぶら下がっているだけの部屋だった。

これといった家具はなく、不気味にも棺桶に似た箱が無造作に置かれているだけである。
「ゴシックな趣味でもあるのかい？」

私が冗談交じりに問うと、彼女は絵を描きながら上目遣いで、私に棺桶の上に座るよう指示した。

「ごめんなさいね。人なんて滅多に来ないから、椅子も用意してないの」

棺桶の上に座り改めて見渡すと、床には絵の具で汚れたパレットや、古い絵の描かれたキャンバスが幾つも転がっていた。

「全部、君が描いたのかい？」

彼女は微笑みながら頷いた。

彼女と出逢ったのは、先月末のこと。行きつけのバーでだった。薄暗い店内に浮かぶ青白い顔の彼女が不気味なまでに美しく、私は年甲斐もなく声を掛けてしまった。

ウィスキーに浮かぶロック氷を指先で沈めながら、彼女は呟いてみせた。

「たまには、酔えたらいいのにな」

不思議な女性だと思った。

彼女は、お酒を幾ら呑んでも酔わないらしい。試しにウォッカを二瓶程ご馳走してみたのだが、本当に顔色一つ変えなかった。

この不思議な女性に興味を持った私は、彼女が何者なのかを知りたくなった。なんと質問しようか考えていると、意外にも彼女から教えてくれた。

「普段は絵を描いて暇を潰しているのだけれど、貴方は何をしているの？」

私は答えた。

「私は小説を書いているよ。けれど売れなくてね、最近まで新聞でコラムを書いていたのだけれど、その仕事もう終わりだ」

私は、大きく溜め息を吐いた。

思い付いたかの様に、彼女が口を開いた。

「人を探してるの。貴方、新聞に物語を書く事は出来るのかしら？」

「人を探しているのなら、物語より呼びかけた方がいいんじゃないのかい？」

私がそう提案すると、彼女は寂しそうに首を左右に振った。

「呼びかけて見つかるなら、彼女はもう見つかってる。彼女は、隠れているだけなんだ。僕に怒って。だから、僕の気持ちを伝えないと、彼女は戻って来ないと思う」

先程まで可愛らしかった彼女の声色が、急に『彼』に変わった。そうなると思の方が自然で、私は彼女に失礼な質問をぶつけてしまった。

「君は女性？ 男性？」

彼女は、はっとして口元に手を当てた後、息を飲んでから小さく答えた。

「どちらでも、あるかな」

と。

益々この奇妙な女性に興味を抱いた私は、彼女兼彼の希望である新聞への連載小説を承諾する事にした。新聞社には、まだコネがある。何とか無理を言ってお願いすれば、内容によっては掲載して貰える筈だ。

そして、私は書くために必要な彼女の物語を聞く為、彼女の住むアパートに呼ばれたところだった。

「そうだ。この物語を始める前に、貴方(きみ)にあるものを見せないとね」

彼女は絵を書くのを止め、私を棺桶から立たせた。彼女が棺桶の蓋をずらすと、中には金髪の息を飲むほど美しい人が眠っていた。死人にしては綺麗すぎるが、生きているとも思えない。人形かとも思った。

「これはね、僕なんだ」

彼女に出逢ってから初めて、ゾクッとした悪寒が背中に走った。

「貴女(きみ)は一体？」

彼女は棺桶の蓋を直し、その上に腰掛けた。再びそこへ私を座らせると、ゆっくりと語り始めた。

「ニンニクも十字架も太陽の光も平気だけど、ヴァンパイアなんて呼ばれた事もある。だけど、そんな限定的なものじゃない。酒だって呑むし、美味しい食べ物は大好きだよ。血だって滅多に飲まない」

「滅多にと言うと、飲むこともあるのかい？」

私は、恐る恐る問うた。もしかしたら、彼女が私を餌にする為に自分をこの部屋に呼んだのではないかと疑ったからだ。

彼女は膝の上で頬杖を作り、きょとんとした顔で私の方へ顔を向けた。

「僕等はね、血を飲むと特殊な能力を発揮する事が出来るんだ。でも、もう二百年近く口にしていないよ。そんなに美味しいものではないしね」

彼女が近くに置いてあったA4サイズ程の小さなキャンバスを手に取り私に渡した。そこには中世ヨーロッパ、もしかしたらもっと昔かも知れない頃の建物の絵が描かれていた。

「シャルル・アンリ・バシュロ・ナルカン。僕の名前だ。その絵は、僕が描いた僕の居た劇場だよ」

私はポケットから、使い込んだ手帳と愛用の万年筆を取り出すと、シャルルの話を書き留める準備をした。

シャルルも私の準備が整うのを待ってから、少しずつ話始めた。

時には思い出すように、時には遠い昔を懐かしむかのように。

遠くを見つめるように話すシャルルの横顔は、美しくも懐かしさに悲しさを含んだ儚さを秘めていた。

月の影法師

あの空は、今でも覚えている。

ブルーは金色の光をキラキラと反射させながら、まるでサテン地のように地上を覆っていた。

この日は、明日から暫く公演される恋愛歌劇“月の影法師”の練習に、皆張り切っていた。

「ああ、王子様。この私を強く抱き締め、あの月に返さないと、そう誓ってくださいませ。私は月の影法師、不覚にも貴方を愛してしまいました」

幸か不幸か……。

僕シャルル・アンリ・バシュロ・ナルカンは、この劇団で女形を専門に務める売れっ子俳優であった。

「不覚、深く。それはあの夜の闇の色よりもか？」

「そうでございます。夜の闇の暗さより遥かにお慕い申し上げます」

十五世紀、ルネサンス時代。これが、僕が人間として生きた時代であった。

何故、僕が女形を専門に俳優業をしていたか。

自分で言うのもおかしな話だが、僕は醜い程に美しい。金色に緩やかなカーブを描く長く綺麗な髪。硝子細工の様に透き通る白く繊細な肌、眼はエメラルドの済んだグリーンをし、唇はミニ薔薇のごとく淡くピンクに色付いている。

どれも、国一番ではないかと評判高かった母の容姿をそのまま受け継いでいた。

そんな僕が女を演じれば、どんな紳士もご婦人も、僕の魅力に目を逸らせないでいた。僕が舞台に立つというだけで、劇場は溢れるばかりの観客に恵まれたのだ。

だが、僕は望んで俳優になった訳ではなかった。美しい母に、売られたのだ。

この頃、母はもう死んでしまっていたが、生きていた頃は無名から有名まで、画家や芸術家達が競ってモデルにと訪れたものだ。しかし、結局は誰もがその美しさを残せないと、キャンバスを破って帰っていった。母はそれを笑いながら見送るのがお気に入りだった。

僕が十五歳くらいの頃、それまで母を見ていた芸術家達が、母ではなく僕を見るようになった。美しい母にそっくりの僕に、芸術家達は若いだけの理由で目を移したのだ。

それが原因か。その頃から母は酒を煽るほど呑み始め、拳句の果てには酒代欲しさに売春婦にまでなった。

母を抱きたがる男は多かった。多い時には、一日に五人もの知らない男が、母の寝室に出入りしていた。

母の欲しがる酒の量は日に日に増え続け、日を増すごとに暴言や暴力も激しくなっていた。

「アンタが女だったらまだ使い勝手が良かったものを!! アンタの父親なんか誰かわからないけどね、ろくでなしの子が!!」

時に鞭が顔に跳ね上がり、青く腫れ上がった顔を隠して過ごした。母は、それを見て笑うのが、気に入っていたようだった。きっと自分の美しさを奪われたと、母は思っていたのだろう。僕の顔を、執拗に責めた。

元々、優しい母ではなかったが、暴言や暴力を振るうような母ではなかっただけに、僕は絶望に打ち拉がれた。

その三年後、幼い頃ソバッカスと呼ばれていた村のそばかす娘が、急に美しくなった。同じ村の僕と彼女は幼い頃からお互いを良く知っていたが、彼女が僕に送る特別な感情も流し目も、僕が最後の最後まで気付く事はなかった。

そのソバッカスと母に“魔女狩り”の御触れが来た。この時の処刑では、他に三人の村娘が連れて行かれた。

ソバッカスは、悪魔と契約し美しさを手に入れた罪。

母は美しさで男達を誘惑し、生気を吸い取った罪。

その時、もしも僕の顔が母の暴力で腫れ上がっていなければ、親子共々殺されていただろう。役人は酒で暴れる母を引きずりながら、ソバッカスを始めとする三人の女達を、大きな鳥籠のような檻にぶち込み吊るし上げた。

翌日だったか。訳のわからない魔女裁判とやらが行われ、檻籠は炎の中に入れられた。脳を切り裂く断末魔の悲鳴の中、母だけが晒っていた。

いつの日だったか、英雄と謳われた若い娘の公開処刑を見に行った事があった。母は『所詮、神の声が聞けても人間は人間だ。歳も取ればいつか死ぬ』と冷たく僕に呟いた。

あの時に良く似ていた。娘も、悲鳴ではなく言葉を唱えていたから。

「所詮、美しくとも人間は人間。歳も取るし、いつかは死ぬ」

僕も、あの時の母の様に冷たく言い放った。そして、腫れ上がった顔を隠すストールの下で、必死に嗚咽を殺して泣いた。

僕は家で独り、今度は声に出して泣いた。泣いていたら、ソバッカスの母親が僕を尋ねてきた。赤く腫れた眼と青く膨れた顔を再びストールで覆って出迎えると、ソバッカ

スの母親も同じ様に泣いていた。

「あの子はね、良い子だったんだよ。アンタの事が好きでね、いつもアンタと並んで歩いてても恥ずかしくない様に綺麗になるんだと言っていたんだよ」

ソバッカスの母親は、僕に銀のロザリオを渡した。

「あの子の形見だからね、アンタに」

それから三日後ぐらいだったと記憶する。突然、劇場の団長が僕を連れに来た。聞けば生前、母が僕を借金のカタにしていたらしい。

「お前には多額の金がかかってるんだ。必要以上に働いてもらうぞ！ 恨むんならロスピアーニャ (ははおや) を恨むんだな」

僕は反抗する間もなく医者連れて行かれ、そのまま団員にされてしまった。

団長には、毎日のように虐められる、僕。これは、後から団員同士の噂話で耳にしたのだが、団長は母にゾッコンだったそうだ。母は脂ののった団長には興味が無く、それでも騙すようにして金や貢ぎ物を巻き上げていたらしい。近いうちに、母を自分のモノにする。そんな団長の野心も魔女狩りと共に消えて失くなった。

母にそっくりな僕は、心も身体も男だ。母への腹いせに、団長は僕を奴隷として死ぬまで離さない気だろう。

飲み残しのワインと少しばかりのパンくず、夕食の残り物を与えられ、団員達の世話に加え舞台の上で血が滲むまで踊らされる毎日。それが、舞台を見上げる観客達の想像とは遥かに劣るトップスター、シャルル・アンリ・バシュロ・ナルカンの私生活だ。

いつか、この顔を焼いてしまおうかと考えた事もあった。顔を焼いてしまえば、母の呪縛から開放される。そんな気がしたから。

実際には出来る筈もなく、そんな勇気もなかった。

「愛しき王子様。今宵も貴方の為に、あのキラキラと輝く月の世界から……」

僕だって人間だ。台詞に詰まることもある。その時は、団長がいつも持っている木のコップを投げ付けてくる。それは舞台上にワインをぶちまけながら、僕の身体に直撃すると、鈍い音を立てながら床に転がった。

王子こと相手役であるダミアン・バルテレモンが、慌てて僕の元へと駆け寄ってきた。

「この木偶の坊が!!」

団長の怒鳴り声が辺りに響き渡る。

「すみません」

屈辱に震えながらも逆らう事すら許されず、ダミアンに支えられながらゆっくりと身体を起こした。

「あのキラキラとかがやく月の世界から、やって参りました」

「ああ、月の影法師よ。あの月がヴェールに隠れてしまう度、私は君も隠れてしまうのではないかと心配なんだ」

「王子様、今日の夜は晴れています。貴方に会えた私の心の様に」

団長が手を叩きながら、満足そうに言う。

「ダミアン、なかなか良い芝居になりそうじゃないか」

こんな時、ダミアンが嫌味を込めて団長に言う台詞がある。

「シャルルが、美人なんでね」

団長は、いつも通り鼻で哂った。

「そろそろ、飯にしようじゃないか。シャルル、直ぐに支度するんだ」

僕も嫌味を込めて、団長へ婦人の一礼をした。

全員が舞台を離れようとするタイミングで、脚本書きのサガスピエールが走り寄って来た。

「月の影法師は、傑作だ!! ご婦人方だけでなく、全ての観客が涙すること間違いのないぞ」

実はこの“月の影法師”まだ完成していなかったのだ。

正直、劇の中身なんて僕にとってはどうでもいい。僕は、命じられたまま演じるだけだ。

それより、団長にまた怒られる前にさっさと食事の支度をしようとサガスピエールの横を擦り抜けようとしたら、まあ待てと彼に腕を掴まれた。

「シャルル。是非、君にも意見を聞きたいんだ」

「僕に？」

「そうだよ。いつもハッピーエンドだからね、今回は、バッドエンドにしてみようと思うんだ」

月の影法師。ストーリーはこうだ。

ある国に、一人の王子がいた。王子は月に語りかけながら薔薇の咲き乱れる自慢の庭を、毎晩散歩するのが大好きであった。

やがて、王子にも婚期が訪れる。ハンサムな王子を狙う女性は後を絶たなかったが、何度お見合いをしても、王子は気に入った女性に巡り合う事が出来なかった。毎日、王子はうんざりと過ごしていた。

ある晩、いつもの様に窓から身を乗り出し月を眺めていると、庭の白薔薇道を歩く一人の美しい娘を見つけた。その娘を運命の妻だと見初めた王子は、なんの疑いもなくその娘に声を掛けた。

娘は言う。いつか自分も王子と共に白薔薇道を歩いてみたいと思っていた、と。

王子は娘に、いつでも待っていますよ、と告げた。

翌日も娘は現れた。王子は娘の名前を聞いてみることにした。娘は“月の影法師”とだけ答えた。

月の影法師は、月の綺麗な夜にだけ現れた。

時が流れても、彼は幸せであった。

変わらない月の影法師。愛を語り共に夢を見て……だが、王子の時間だけは無情にも流れていった。

ある日、水面に映る自分の老いた姿を見つめて王子は絶望する。絶望は怒りとなり、変わらない月の影法師を魔女だと罵り始めた。

月の影法師は自分が月の精霊である事を明かし、王子の前に現れる以前から王子の事を愛していたと告げた。しかし、年をとり、絶望した王子には理解されなかった。

王子は、月の影法師を塔から突き落とそうとし、逆に王子が足を滑らせて死んでしまうのだ。

嘆き悲しむ影法師を背景に、舞台はそこで幕を閉じる。

「どうだい？ シャルルは悲しい役の方が、より一層引き立つと思うんだ」

サガスピエールの問いに、僕はどう答えたらいいか戸惑いながらも、月並みな感想を述べた。

「いい話だね。きっとまた満員になるよ」

サガスピエールは、満足そうに頷いた。

せめて、コメディとまではいなかいにしろ、ハッピーエンドであれば良かったのと思う。そうすれば、舞台の上だけでも少しは悲しくはなくなるから。

紹介が遅れたが、ダミアン・バルテレモンは、僕の相手方や二枚目の主役を演じる事が多かった。彼は僕とは対照的な男らしい色気を持っていたから、この劇団では僕と並ぶ程の人気っぷりだ。

なにより、ダミアンは僕の一番の親友でもあった。

ダミアンとは、よく二人で語り合ったものだ。中でも特に印象深いのが、月の影法師の公演前夜だ。

僕は部屋を訪れて来てくれたダミアンの為、転がる蝋燭を手探りで拾いあげると火をつけた。

「シャルル、見てくれよ」

ダミアンは、持っていた箱の中から銀のカップを一つ取り出し、僕の前に差し出した。カップを手にとると、繊細な彫刻が施されていて、実に綺麗な品だった。

「綺麗だね。これがどうしたの？」

僕の問いに、ダミアンは興奮気味に答えた。

「父の形見だよ。聖女から貰った物らしいんだ」

「へえ、凄くないか」

驚いた顔を向ける僕の手からダミアンはカップを受け取ると、彼はそれを蝋燭の揺らめく炎の明かりに照らしながら、愛しそうに彫刻を撫でた。

「僕はね、オルレアンから来たんだよ。自分を偽って役者になった。これは、戦士だった父が戦場で肺を患い已むなく帰還する時、聖女が回復と幸せを祈って父にくれたものなんだよ。優しさ、気品、強さに幼い僕は憧れた。だけど、父には敵わないと思った。だから、舞台の上ではどんな勇者にでもなれる役者を目指したんだ」

暫く愛しそうに銀のカップを眺めていたダミアン。その横顔は、蝋燭の炎に揺らめきながら、うっとりする程魅惑的に見えた。

「シャルル、このカップを今だけ君に貸してあげようと思うんだ」

「え？」

彼の意外な申し出に、僕は思わず疑問符を上げた。

「これは父が、“幸運”と“回復”を願って贈られたものだから。明日の公演で、君に幸福が舞い降りますように。僕は君と最高の芝居がしたいんだよ」

ダミアンの大切な大切な銀のカップを再び受け取ると、僕も彼と同様に銀のカップを優しく愛でた。

「ありがとう」

ダミアンは、優しく笑う。

「気に入った？」

「僕には、勿体ないくらいだ」

ふと、彼の表情が悲しげに揺れた。

「悲しくて繊細で、脆く、儂く、実に美しい。憂いのヴェールがそれに拍車をかけている。それがきっと君の美しさ。そして、このカップも同じだよ。父への祈りは届かなかったのだから。そう言えば、月の美しさも君の美しさによく似ている気がするよ」

—— 月？

月の美しさとは何か。

暗闇に独り、冷たく白く揺れる。寂しくないかと問い掛けたら、きっと月はこう答えるだろう。

『星達が歌ってくれるから、寂しくなんてないんだよ』

なら……

今の僕に、星達の歌に変わるものは存在するのだろうか？

「さあ、カップを出して」

ダミアンが、ワインボトルのコルクを抜いて言った。僕がカップを差し出すと、彼は銀色のそれに血液よろしく真っ赤なワインを並々と注いだ。

そして、新たに箱から取り出したもう一つの同じ銀のカップにも、ワインを同様に注いだ。

「明日の成功を祈って」

無邪気に笑うダミアンの顔が、蝋燭の炎によって暗闇に浮かびあがる。

「うん、成功を祈って」

唇に触れた銀のひんやりとした感覚も、鼻腔いっぱいに占めた葡萄の香しさも、喉を通る濃厚な甘みとずっしりとした渋みも、その笑顔には敵わない気がした。

その晩はかなり遅くまで二人で語り合った。声を潜めるのが困難な程笑い合い、そして何よりも楽しかった。

——これこれこれ

そこいく紳士の方々

そこいく淑女の方々

少し足を止めて行かれませんか？

ワタシは人形

お金の増える人形

さあさあ

如何なさいましょう？

男になりましょうか？

女になりましょうか？

全ては貴方の望むがままに

一つお辞儀で銀貨が増える

二つお辞儀で金貨が増える

三つお辞儀で何をくださる？

ワタシハニンギョウ

オカネノフエルニンギョウ

キレイナニンギョウ

ミニクイニンギョウ

アクマノニンギョウ

翌朝も、雲一つない青空だった。

僕は、朝から風呂に入った。この時間が一番好きだ。

この時代の風呂は、気になった時に入るのが常識だ。よく風呂に入る者と言えば、ス

ポーツマンくらいしかいなかった。

また、当時はペストという悪魔の病気が大流行していた。風呂によく入る者が感染する等という迷信が流れるくらい、人々は風呂に入らなかったのだ。だから、僕は普段人目を忍んで身体を拭く程度で我慢するようにしていた。

ペストの影響は脅威だった。とある田舎町では、家主が逝ったあと魔除けと称して死体を軒先に飾る風習があったそうだが、それも厳しく廃止されたと聞く。香水や酢がペストに効くとか、魔術やお守り、札、挙句には鞭打ち苦行を行う者まで出てきた程だ。

この時はまだ、僕の居た場所にはペストの影響は無かったのだが、皆噂話にはよく注意していた。

風呂から出ると、僕は他の団員に連れられ、別の部屋で舞台用に着飾ってもらい、濃い化粧を施される。

月の影法師の舞台は十三世紀。と言う事で、ブリーオーと呼ばれる表着にベルトを締め、マントを着付けた代表的な衣装になる。それにウインプル（ベール）を身に纏えば、妖艶な姿がより一層引き立つのだ。解らなければ、トランプのクイーンの姿を思い描けばよい。

「シャルル」

ダミアンが呼んだ。振り返ると、彼もまたブリーオーにマントを身に着けた、王子の姿となっていた。

「あら、王子様」

僕は、ほんのちよっぴり声のトーンを上げながら、スカートの端を持ち上げて軽く一礼した。

ダミアンが笑みを浮かべながら掌を差し出すので、僕はお決まりごとの様にそこへ手を置いた。

「マダム、シャルル。では、こちらへ」

ダミアンもお決まりごとの様に、僕の手の甲へ紳士的なキスをくれた。

舞台裏からそっと覗く観客達の世界は異様だ。僕には、一生縁のない世界。この中に、僕のお辞儀を見る為に集まった人間が何人もいるんだと思ったら、不謹慎にも気分が悪くなる。

……ボクハ、ミセモノジャナイヨ……

……ボクハ、ニンギョウデモナイヨ……

そう僕の中の何かが囁くが、所詮お金の増える人形でしかないのが現実だ。

芝居が好きでなかろうが、人形は人形なりに踊らなければいけない。誰よりも美しく、誰よりも華麗に。いかにお金を頂けるかが、重要になるのだ。

この時代の劇場と言えば、まだ美術にしる小道具にしる時代考証に対していい加減であった。劇場舞台は野外劇場を生かした形をしており、平土間の上には屋根がなく、四方から観客が眺められるようにと真ん中まで突き出した張出舞台となっていた。

舞台下は人気が高く、僕が歩き周れば周る程高価な席となっていた。また、尤も見晴らしの良い席は、王宮の人間や貴族、金持ちが座る事が殆どで、淑女にしる紳士にしる揃って皆僕に魅入ったものだ。だから、時折観客に視線を送りながら台詞を歌えば、それなりに金貨を投げられる事もあった。

余談だが時代は一四四六年頃。イギリスにてウィリアム・シェイクスピアが誕生したのが一五六四年であり、彼が劇作家として活動したのが一五九〇年以降の事。しかし活動といってもシェイクスピアの名を聞く迄には、暫く時間を要したと思う。

それから一五九二年より一五九四年の間、ペストが酷くなり全劇団閉鎖命令が下されたと記憶する。

後に話す事とはなるのだが、僕はこの時代既に劇団から身を引いていたため詳しくは知らないが、敢えて言うならば、僕が人として戯曲で踊り狂っていた時、まだシェイクスピアもレオナルド・ダ・ヴィンチも生まれていなかった訳だ。

話は逸れたが、この“月の影法師”が僕にとって最後の戯曲となったのだった。

粗末な幕が上がると同時に観客達が拍手で迎える。日の光に反射して、俗世はドレスに施された金の刺繍や、身に纏う宝石が眩しい程に煌めきを見せた。

僕等は何もないボロ板の床を、さも白薔薇の庭だと思い込んで、それらしく練り歩かなければならない。

「ああ、月が微笑みを浮かべて私に自由をと語り掛けるその優しさを、星が瞬きを歌いながら私に安らぎの夜(よ)を示してくれる。私は月の影法師。月の影であり、陽に嫌われた存在。月と星だけが私を美しく照らし、闇が私を愛して離さない」

くるくるくと、金の髪を揺らしながら舞台の上を行ったり来たり。やがて観客から向かって左側より、ダミアン王子が現れる。

「どの乙女とて、私の心を満足させてはくれない。美しさもやがて薔薇の様に枯れるもの。終わりなき愛などあるのであろうか？ 我が財を我が家を狙う女共に興味などない。許される事であるならば、この身を蝶と成り、白薔薇を抜けて愛しき蝶を見つける旅へと立ちたいものだ」

同じ舞台でありながら、違う世界を演じる。

今見れば、子供のごっこ遊びの様に見えるかもしれない。

照明もなければ大道具どころか小道具すら殆どない。

それらしい衣装を纏ったら、むき出しの舞台上で劇作家のお気に召すステップを紡ぎ、並べて立てられた詩を歌うだけ。

「再び太陽が昇り始めます。私は行かなければ。行かなければ」

「ああ、醜い太陽よ。この美しき暗闇が、いつまでも続く事を願っているというのに。おお、神よ。何故貴方は私の願いを聞き届けてはくれないのだ？」

「これは永遠の別れでは、ございません。また明日お会いしましょう。月が昇る頃、この薔薇の道で私は待っております」

これでも当時は数少ない楽しみの一つであり、誰もが夢中になって目を見張る娯楽だったのである。

月の影法師の初舞台は、沢山の拍手喝采に包まれ幕を閉じた。文字通りの大成功であった。

幕が閉じきった時、ダミアンが僕だけにしか聞こえない様にポツリと洩らした。

……君が男である事が、恨めしいよ……

何故か、脳裏にソバカスが蘇った。籠の中、燃え盛る炎、途絶える事のない断末魔の悲鳴。母の狂った囁い声に交えて、彼女は死ぬ間際、一言だけ叫んだ。

……貴方こそ悪魔なのに……

あの時の光景だった。

僕は急に吐き気を催し、急いで外へと飛び出した。

僕の身体は、僕自身にしかわからない“人の焼ける匂い”に包まれていた。耳の奥で流れ始めたのは、聖女の祈りの言葉。忘れはしない。言葉が消えた時、焼けただれた彼女の身体から頭がガクンと頂垂れた。

そこまでの記憶が一瞬にして頭の中を駆け巡り、僕は意識を失った。

その後の事は、殆ど覚えていない。ただ、気がついたとき、僕はいつもの黴臭いベッドの上に寝かされていた。

月の影法師は、約一ヶ月程度公演された。正しくは、一ヶ月程度しか公演出来なかったのだが、この話はまた後ほど詳しく話すとしてしよう。

初公演以降、何の変哲もない普段と変わらぬ毎日を過ごしていたのだが、初公演日から半月程して、隣町がペストで全滅したとの噂を聞いた。大盛況だった劇場も日に日にお客が減り始め、終いにはペスト恐ろしさに外出する者さえ減り始めた。

当時のペスト大流行では最高潮の時、パリでは毎日八百人もの人々が命を落としていった。ペストにかかるとリンパ節腫脹、体重減少、意識混濁、皮下出血、咯血、下痢、眼の炎症、脱水症状、皮膚潰瘍といった症状が現れる。目立つ皮膚潰瘍と皮下出血から別名“黒死病”とも呼ばれた。

当時の医者は、浣腸や嘔吐剤によって腐敗したガスや食べ物を体内から取り除く治療や、消毒の意味を持つ薔薇の香水でこまめに口を濯がせるなどした。そして、症状が酷くなると、身体をメスで切り裂き、血液を減らす瀉血治療まで行なわれた。

だが、多くは助からず、無駄な治療に終わっていった。

皆我先にと逃げた。ペストに倒れた者達は、パンとワインを枕元に誰からも見捨てられた。

悪魔そのものであるペストが、隣町まで来ている。早くも金のある者は、町から離れ始めていた。

更にその半月程して、突然一人の男の子が新しく入団した。ロラン・エイメ。見るからに僕より十歳近くも若いであろう少年であった。強い癖の金髪が特徴で、髪とよく似た金色の眼をした、女の子のような可愛らしい容姿の持ち主であった。彼に家はなく、両親もおらず、道端で眠っていたところを団長に拾われたらしい。口は利けるが、あまり話をしようとはしなかった。常に何かに怯えているようだった。だが、構わず団長はこの少年、ロランを僕に代わるトップスターにすると張り切っていた。

「何か、泣ける話がいい。そうだ、シャルルがロランを虐める話がいい。そして、ダミアンがロランを救い出し、シャルルは処刑されるんだ」

そんな、筋書きまで創り出す始末。ロランに金貨の臭いを感じた団長の暴走は止まらず、サガスピエールですら団長の無理で定まりの無い脚本作りに頭を悩ます程だった。

一度だけ、僕はロランと話をしたことがある。

ある日、僕の部屋にロランの方から訪ねてきたのだ。

「シャルルさん。とても綺麗ですね。いつも、思っていました」

ロランは訪ねてくるや否や、突然こんなことを言い出すから驚いた。

「ありがとう。どうしたの？」

僕が問うと、ロランはぼろぼろと涙を溢し始めた。再び僕は驚き、取り敢えずロランを部屋に入れた。

「驚いた？　こんなに、黴臭くて汚くて」

ロランを椅子に座らせ、僕はベッドに腰掛けた。ロランは止まらない涙を何度も何度も拭いながら、僕の部屋を見渡し、「いえ……」と小さく呟いた。

僕はロランに、どうしたのかと再び問うた。

「……ボクは、お芝居なんて出来ない……。シャルルさんの代わりに、なんて無理だ」

ロランは、泣きながら小さな声で答えた。

「僕だって、そうだよ」

僕は、ロランに言った。

「僕だって、好きで芝居をしている訳じゃない。人形なんだよ、僕は。だから、団長が言うままに演じなきゃならない」

ロランは、少しの間呆気にとられた様な顔で僕を見つめていたが、目を逸らすと少しずつ自分のことを話し始めた。

「ボクは、ここからずっと遠くの村に住んでいたのだけれど、ペストが流行って逃げました。でも、次の村でもペストが流行って……。ボクは、逃げて逃げて、逃げる中で大切な人を沢山見捨てて来ました。……ボクは……悪魔なんです」

……貴方こそ悪魔なのに……

ソバッカスの言葉が蘇る。

「何故そう思う？」

ロランは言った。

「沢山の死を見てきたから」

と。

「ペストの人間を、見たことがありますか？ ペストマスクを着けた医者、ボクには死神にしか見えなかった。だけど、ペストの蔓延した村を、街を見るうちに思ったんです。ここは地獄だ。地獄の中で走り回る自分は……僕が地獄の中を走り回れるのは悪魔だからかも知れないって」

僕は、ロランの話を聞きながら思い出していた。母やソバッカスが連れて行かれる前でも、僕の周りでは魔女狩りが行われていた。炎の中に投げ込まれる者、水の中に沈められる者、皮を剥がれる者。

子供の頃、僕を無理矢理広場に連れて行った母が見せたかったモノは、聖女の処刑ではなく地獄という現実世界だったのかも知れない。だとしたら、きっと僕の処刑はあの日から始まり、そして未だ終わってはいない。

「……僕だって悪魔だ。沢山の死から目を背けて来た。地獄の中にいたのはロランだけじゃない」

誰だって

「生き残った奴は悪魔だ」

全てが、地獄なんだから。

ロランが、再び涙を溢し始めた。

「だけど、ロランは悪魔じゃない。僕も、悪魔じゃない。ただ、弱くて、弱いくせに生き

る事には運が良いだけだ」

ロランが問う。

「ボクは、生きていてもいいんですか？」

僕は答えた。

「それは、僕には解らないよ」

きっと、ロランはずっと苦しかったのだ。沢山の人が死に、居場所を追われ、死の恐怖から逃げ回るうちに、生きることに執着しながらも、生きる事への自信を失い始めていたんだと思う。

「でも、生きたいと思ったら、生きるしかないんだよ」

ロランは、何も言わずに頷いた。

「ボクは、まだ死にたくないんです。だって、死ぬのは怖いから」

正直な感情だ。

「僕だって、そうだよ」

僕がそう言うと、ロランは初めて笑って見せた。

「シャルルさんの事を、聞いてもいいですか？」

ロランは、少し戸惑ったような素振りを見せたが、何かを決意したような真剣な眼差しで、僕に質問をした。

「シャルルさんが人形って、何故ですか？」

隠してもいずれ解る事だから。僕は、ロランに身の上話を始めた。

「ロラン。君から、僕はどう見える？ 男に見える？ 女に見える？」

「シャルルさんは、男の人ですよ？ でも、最初はずっと女の人だと思っていました」
ロランだけじゃない。初めて僕を見た人間が、僕を男だと思うことは先ず無い。そして、誰もが女のくせに男装なんかしやがって、聖女の真似かと罵るのだ。

「僕の母さんは、綺麗な人だったんだよ。僕は、母さんの容姿をそのまま受け継いだ。だけど僕は男だから、娼婦にもなれなかったし、男に媚びることも出来なかった。だから母さんは、僕を劇団に売ってお金に変えたんだよ」

ロランの顔が、歪んだ。

「シャルルさんが、もし女の人だったとしても……」

「そう、僕は生まれた時から人形なんだ」

ロランは、言葉に詰まったまま、暫く顔を伏せていた。そして、涙で濡れた顔を再び僕に向けた。

「シャルルさんは、人形なんかじゃない。人形なんかより、ずっと綺麗だ」

と、言ってくれた。

僕は、笑った。失礼だと知りながら、止められなかった。嬉しくて笑った。きょとんとするロランを涙でぼやける視界で捉えながら、お腹が痛くなるまで笑った。

「……ごめんね。嬉しくて」

ロランも笑った。

……ボクは……悪魔なんです。

ロランの言葉の本当の意味を知ったのは、この日から三日後の事であった。

僕が望んでいたのは役者の生活ではなく、画家としての人生だったのだ。さほど有名になれなくてもいいから、絵を描きながらひっそりと暮らせればそれで良かった。ただ、一つ贅沢を言うなら、いつか教会の天井一面に自由に筆を走らせてみたかった。

……ボクは……悪魔なんです。

ロランの言葉が、蘇る。今、考えればあの言葉で、気付くべきだった。

彼が、何故人との接触を控えてきたのか。何故、あんなに怯えていたのか。

三日後、僕は高熱に倒れた。

ペストに倒れて

朦朧とした意識の中、団長の罵倒する声や団員達の叫び声が聞こえ、ロランの「ごめんなさい」との謝罪が耳に残った。時々目を覚ますと、視界に映る自分の腕に黒い痣の様な跡が映り、それは徐々に広がっているかに見えた。

ペストだ、と認識した。

苦しくて咳き込めば、口元を抑えた掌やベッドの上に、血液が広がった。

何度目かは記憶に無いが、それでも何度も目を覚まさないうちに、僕のベッドの脇にパンとワインの投げ込まれた籠と、ダミアンが見せてくれた銀のカップが置かれていた。当然に、劇場から人の気配は消えていた。

それは紛れもなく、独りで死ね。との意味であった。

ペストは、元々クマネズミ等の齧歯類に流行する病気で、菌に感染したクマネズミ等の血を吸ったケオブスネズミノミ等が人間の血を吸った際、その刺し口から菌が侵入する事で感染する病気だ。他に、ペスト患者からの感染もあるが、このノミが人にくっつき、人を使って広い範囲に被害を齎したと言われている。だが、当時のヨーロッパの街は余りにも不潔で、ノミや害虫は人の身体から生まれると信じられていた時代だった。そして、当時の人々の中に、ペストの原因を解明しようとする者はいなかった。それだけ、恐れられていたのだ。結果、感染の原因がはっきりするまで、相当な時間を要した。

ペストに侵された街中を逃げ回ってきたロランが、ペストノミを身体に付けていたと今なら容易に想定出来るが、当時の僕は当時の世間常識程度にしか知識が無かった為、ロランが魔術を使ったと思考した。そう、ロランの言った悪魔の単語をそのまま捉え、僕は生贄にされたのだと思ったのだ。きっと、ロランがこの先も生き延びる為の、魔術の生贄だろうと。

本当に、今思えば恥ずかしい程に無知故の情けない考えだった。

死を待つ間、僕はロランを呪っていた。けれど、暫くして、そんな自分の愚かさに涙が溢れた。生きている間は、それが苦痛でならなかったのに、いざ死を前にしてみれば、こうして死を齎した人間を呪うのだから。本当に、僕はなんて都合の良い人間なんだろうかと。

いつ、どのタイミングで自分が死ぬかは解らない。高熱に魘され、目が覚めた時に生きていたら、安心と不安と絶望を繰り返すだけだった。時間の経過も解らなかった。ただ酷く喉が渇いたため、ワインはあっという間に無くなってしまった。

夢か幻覚だったかは未だにはっきりしないが、僕はその時、子供の頃の忘れていた記憶を見ていた。

僕が十歳にも満たない幼い頃、旅の絵描きが村に来た。ソバッカスと一緒に遊んでいる時だった。その絵描きは僕を見て、僕の絵を描きたいと言った。僕は、母に内緒でソバッカスと一緒に絵だったらいいと答えた。

その絵描きは、鞆の中からオークの板を取り出すと、そこに僕とソバッカスを描き始めた。いつも母が絵を描いて貰っている姿は見えていたけれど、自分が描いて貰うのは初めてだったから、本当にわくわくした。ソバッカスは、終始照れているようだった。

やがて、スケッチが出来上がり、絵描きは僕達にその絵を見せてくれた。簡単な下絵しかなかったのだが、繊細で綺麗な絵だった。その絵は、背中に鳥のような羽根の生えた天使の絵だったのだが、その天使が僕とソバッカスだったのだ。僕は、その絵の中に限りない自由を魅た。

絵描きは、この絵を完成させるために自分の家に帰ると言った。ずっと、この天使のモデルを探して旅をしていたんだと言っていた。だから、僕はその前に、絵を教えて欲しいと頼んだ。

絵描きは、モデルのお礼だと言って、持っていたオークの板を三枚と、ひとかけらの木炭をくれた。それらを僕は、母に見つからないよう自分のベッドの下にこっそりと隠した。

最初はオークの木の板になんとか絵を描こうと試みたものの、初めてにして上手く描けるはずもなく、結局は無駄にしてしまった。それからは、石を使って地面に絵を描いた。毎日夢中で、本当に楽しかった。

ソバッカスが魔女狩りで連れて行かれる少し前、僕は幼い頃から大事にしていた二枚目のオークの板に、ソバッカスの絵を描いて彼女にプレゼントした。ソバッカスは、本当に喜んでいて。三枚目のオークの板は、使われることが無かった。

今思えば、ソバッカスはいつも隣にいた。明るくて優しい娘だった。彼女だったら、ペストに侵された自分を見捨てたりしなかったのだろうか。

不意に現実に戻り、いつも枕元に置いてある銀のロザリオに手を伸ばした。ソバッカスの形見だった。そして、思う。絵を描こうと。

咳き込んだ際に吐き出した血液をダミアンの銀のカップで受け、それを指先に付けると木の床に赤い線を引いた。

久しぶりに、楽しかった。死の恐怖も苦しみも忘れて、自分の血糊を絵の具に、床に絵を描いた。どうせなら大きな絵を描こうと張り切った。熱で頭がおかしくなっていたから、ちゃんと描けていたかも何を描いていたかも全く解らないが、全てから開放された気分だったのは確かだ。

僕は自由だ。人形なんかじゃない。もう、繋がれる事もない。その全てを、床にぶつけた。

描いて描いて描いて……描きまくる僕に完成は無かった。完成など、考えてもいなかった。

た。血糊が無くなると、僕の肺は絵の具を提供してくれた。

いよいよ身体が動かなくなってきた時、ふと人の気配に気が付いた。僕を見下ろすように、赤いドレスの女性が僕を見下ろしていたのだ。

「……ソバッカス……」

彼女が、迎えに来てくれたのだと確信した。ありがとう、と目を閉じた僕の唇に彼女はキスをした。

「美しい薔薇」

ソバッカスのキスは、生暖かい鉄の味がした。乾いた喉を潤すように、どくどくと流れ込むそれは、優しくも感じた。

時々咳き込む僕の背中を摩りながら、彼女は僕に永遠とも思えるキスをし続けた。人の温もりを感じるのは、どのくらい振りだろうか。冷たかった母親も、僕が絵を描くまでは時々おぶってくれた様に思う。あの時の温かさに似ている。

子供の頃に戻った気がした。とても、幸せだった。

「さあ、ゆっくりとおやすみなさい。そして、あなたは生まれ変われる。あなたは、選ばれた人。美しい薔薇」

ソバッカスの唇が僕の唇から離れ、彼女が子守唄でも歌うように優しく告げた。ペストによる身体の痛みも、呼吸の苦しさも徐々に楽になるように思えた。いよいよ、僕は死ぬのだ。

人の死とは、なんと安らかなモノだろう。

こんなに気分のいいモノなら、もっと早く死ねばよかったとさえ思ったくらいだ。身体中の力が抜け落ち、僕の意識は真っ暗な闇の中に吸い込まれていった。

デカメロンという著書にて、ボッカチオは当時の様子をこう記述している。『毎日毎日、棺桶と死体が運ばれてくる。全ての教会では朝に夕に、夜通し弔いの鐘が鳴り響いた。しかし、まもなく棺桶に付き添って泣く者はいなくなり、墓地は郊外に見捨てられ、弔いの鐘も鳴らす者もいなくなった。』と。

教会の墓地には深い溝が掘られ、その中に運ばれてきた何百という死体が投げ込まれるだけだった。どの死体置き場も、やがて死体で溢れ返る。

遺体を埋葬しようとする者はいなくなり、孤独に息を引き取った病人は、そのまま朽ち果てるしかなかった。

【続】

【試し読み】サクリフェイス

著 鞍馬 榊音(くらましおん)

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
